

書 評

オオタカの生態と保全

その個体群保全に向けて

尾崎研一・遠藤孝一（編著）147 頁

2008 年 12 月 日本森林技術協会

2,800 円 + 税

ISBN-13: 978-4-88964-015-1

本書は、近年行われたオオタカ保全に関するプロジェクト研究の成果をまとめた報告書である。しかし通常の研究成果報告書の形式にとどまらず、広く国内外の研究成果や保全の情報等を紹介している点が特徴である。なお、私はこの本の“あとがき”で謝辞をいただいている一人ではあるが、この本をことさら肯定的に評価しなければならない立場にはない。書評を書かせていただくにあたり、予め申し添えておきたい。

本書の構成は、第1部「オオタカの生態」と第2部「オオタカの保全」からなる。第1部では国内外の研究成果を引用しつつオオタカの生態を紹介し、それらの知見がオオタカの保全にどのように関係するのかを説明している。第2部ではより具体的な保全策に踏み込み、国内外でのオオタカの保全状況を検討した後、関東と北海道をモデル地域としたオオタカ保護区の選定方法と個体群存続可能性分析(PVA)による保護区案の評価法、選定された保護区での保全策などが提案される。著者らは、個体を対象にした従来のオオタカ保全策に代わり、今後は個体群を対象とした管理が行われるべきだと主張している。

本書はプロジェクトで得られた研究データに加え、著者ら自身のものを含む多くの文献を引用しており、その情報量は過去に日本で出版された猛禽類管理に関する本に比べても出色であると言える。それら文献の多くはここ数年の間に出版されたものであり、今更ながらオオタカが国内外でいかに注目され、研究され続けているかを実感した。オオタカの生態や保全に関する最新の情報を網羅している本書は、猛禽類保全の実用書として高い価値を持つだろう。

本書の内容の中核をなすのは、オオタカのデー

タを使って展開される保全生物学的アプローチである。日本でオオタカの保全が問題になり始めた1980年代は、1985年にアメリカ合衆国で保全生物学会が発足し、翌年に生物多様性フォーラムが開催されるなど、保全生物学が脚光を浴びてきた時期でもあった。本書で提案される個体群管理法の技術的バックボーンとして使われている地理情報システム(GIS)、PVA、DNA解析などは、それ以降急速に発達し、現在多くの生物の保全策に利用されるようになってきているものであり、この分野の実用科学としての発展を感じさせる。本書ではわかり難い専門用語は本文と別途に“Box”を用いて解説する配慮がなされており、オオタカを題材とした保全生物学入門書として読むこともできるだろう。

従来の日本のオオタカの保全対策には個体群保全の視点が欠けていたとして、その必要性を説く著者らの主張は妥当なものだろう。ただ、本書に紹介された保全策を読んで、オオタカのように極めて強い分散能力を持ち、かつ広範囲に生息している生物の管理指針を、個体群モデルに依存して決定していくことの現実的な難しさも感じられた。国内のオオタカを一個体群として管理せざるを得ないとすると、最小存続可能個体数(MVP)を残すような保護区設定の選択肢はかなりの数になるだろうし、本文中でも示唆されているように、各地域への保護区の割当などの可否はPVAだけで評価できるものではないからである。この点については、本文中で簡単に説明している地域レベルでのオオタカの重要性と、全国レベルの保護区設定をつなげるような議論があっても良かったと思う。

ともあれ、最新の保全生物学の技術を駆使してオオタカの保全を扱った本書は、読み応えがあることは間違いなく。オオタカに関する基礎知識や、現在置かれている状況、研究の進展などを把握する上で、これ以上の本はないだろう。猛禽類の生態に興味がある方や野生動物管理に関わりのある仕事を持つ方はもちろん、保全生物学を学んでいる学生などにも広く手にとっていただきたい。

東條一史

(森林総合研究所)